

アメリカ化される LGBT の人権： 「ゲイの権利は人権である」演説と〈進歩〉というナラティヴ 川坂和義

1 はじめに

近年の国際的な人権問題に関して、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランス・ジェンダー/セクシュアル）に関わる人権の認識の変化は注目に値するものである。2011年6月には、国連人権理事会でLGBTの人権を支持する決議が採択されただけでなく、同年の10月にはイギリスのデーヴィット・キャメロン首相が、イギリス政府は同性愛者の権利を支持し、国際援助の打ち切りなどを通じてウガンダなどの同性愛者の人権を抑圧する国に圧力をかけていくべきだと語った（“Cameron”, 2011）。2011年12月6日には、ジュネーブの国連欧州本部でアメリカのヒラリー・クリントン国務長官が、「世界人権デー」の記念講演において、「ゲイの権利は人権である」と呼ばれる演説を行った。アメリカの最高裁において、同性愛行為を刑罰の対象とするソドミー法に違憲判決が出たのが2003年であったのを考えると、LGBTの権利に対するアメリカの変化の速度は興味深い。現代の民主主義国家において、国際的にLGBTの権利は守られなければならないものとして急速に位置づけられつつある。

しかし、急激に変化しているLGBTの権利に対する現代の国際社会の状況は決して全ての側面において好ましいものとは言えない。例えば、キャメロン英首相の発言に対しては、当該国の政治家から反発があっただけでなく、女性やセクシュアル・マイノリティーズのアクティヴィストからもLGBTの人々の生活も支援金の削減によって影響を受けるのだとして、反対の声明が出された（“Uganda”, 2011; “Statement”, 2011）。今日、問われなければならないのは、主に西欧諸国や北米を中心にしたLGBTの人権の主流化が国際的にどのような影響を及ぼしているかということだろう。

本論文は、LGBTの権利を語る上で画期的な演説と言われているヒラリー・クリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説のナラティブやLGBTの人権をめぐるインターネット・ニュース、アメリカやイギリスの

有名紙などの言説を分析しながら、LGBTの人権をめぐる現在構築されつつある国際関係の表象について批判的に考察する。¹

まず、導入として、クリントン国務長官による「ゲイの権利は人権である」演説前後のバラク・オバマ大統領の宣言文やアメリカ大使館によるLGBTの権利に関するイベントを例に、LGBTの権利がオバマ政権によってどのように表象され位置づけられているのかを指摘する。第二に、アメリカのゲイ・アクティビズムをめぐる「ホモナショナリズム (homonationalism)」という用語を提出し、現在のクィア理論に多大な影響を及ぼしている Jasbir Puar (2007) の論考を追いながら、彼女の議論の特徴とその問題点を論じる。第三に、クリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説のナラティブとその反響を読み解くことで、現在のLGBTの権利をめぐるアメリカの政治的言説の特徴を抽出することを試みる。最後に、このようなアメリカの言説がどのように日本のLGBTアクティビズムに影響を及ぼしえるかを本稿は考察する。

2 アメリカのLGBTの権利の政治的表象

2011年12月6日に行われたクリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説は、LGBTの権利の歴史において画期的なものとして注目を集めた。この演説は、アメリカ軍内の“Don't ask, Don't tell”政策の廃止や同性婚容認の世論の拡大などオバマ政権によるアメリカ国内のLGBTの人権施策の延長であり、同性愛行為の犯罪化やその他のLGBTの人々への抑圧など他国のLGBTの人権侵害に対するオバマ政権の国際的な人権施策の姿勢を示すものとして捉えられた。ニューヨークタイムズ紙は「ゲイの権利は人権である」演説の翌日の報道で、オバマ大統領やクリントン国務長官は具体的にどのようにLGBTの権利の世界的な改善を行っていくのかは語っていないが、国際的な人権問題としてLGBTの問題を取り上げることは象徴的な意味を持つものだと、この演説をジミー・カーター政権の「人権外交」に通じるものだと報じた (Mayer & Cooper, 2011)。

事実、未だ象徴的なものに留まっているものの、オバマ政権は国際的なLGBTの権利の推進のために活動を行い始めている。日米の関係に注目する

と、在日アメリカ大使館を通じて LGBT の権利に関する啓発活動が特徴的である。2011年5月31日に、オバマ大統領は6月を「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー・プライド月間」とすると発表し、これに伴い各国のアメリカ大使館においても LGBT に関連したイベントを開催している。この発表の中で、オバマ大統領はこのように述べている。

我々は LGBT の権利が人権であると認識しているために、わが政権は世界の LGBT の人々の平等を支持し、LGBT の人々を狙った有害な法や LGBT 団体が国際的なシステムに参加することを排除する悪意に満ちた試みに対する闘いを率先していく。[...] 誰も、その人がどのような人間であるのか、そしてその人が誰を愛するのかということでは害を被るべきではない。よって、わが政権は、憎悪とホモフォビアに対する闘いに加わるよう世界各国からも前例のない公約を引き出している (“Presidential Proclamation”, 2011)。

このようなメッセージから、オバマ政権がクリントン演説以前から LGBT の権利を国際的な政治問題のひとつだと捉えていたのは明らかだろう。

また、この文章の中で、オバマ政権のこれまでの業績として、連邦政府による住宅支援の LGBT の人々への差別的取り扱いの是正や同性パートナーの病院での面会の権利、連邦政府職員への性自認を理由にした差別の禁止、カミングアウトをした同性愛者の人々の連邦判事への指名などの筆頭に、“Don't ask, Don't tell” 政策の廃止を挙げている。

大統領就任以来、わが政権は LGBT のアメリカ人の平等に向けて大いなる進歩を達成してきた。昨年の12月、私は差別的な “Don't Ask, Don't Tell” 政策の廃止に署名したことを誇らしく思った。この廃止によって、わが国の歴史上初めてゲイとレズビアンアメリカ人が公然と軍に従事することができるようになる。我々の安全保障はより確かなものになり、これらのアメリカ人によるわが軍への英雄的な貢献は — それは私たちの歴史を通じて行われてきたのだが — 全面的に認め

られるようになるだろう (“Presidential Proclamation”, 2011)。

オバマ政権が発表したこの言葉に明確に表れているように、現在のオバマ政権が用いる政治的レトリックにおいて、同性愛者の権利の推進とアメリカの発展および安全保障の強化は結びつけられているのである。

このような政治的表象の特徴は、在日アメリカ大使館のイベントでもみられる。2012年6月4日、東京の在日アメリカ大使館は、LGBTプライド月間に関連して政治家やアクティヴィストなど約150人を招いてレセプションを行った。アメリカ軍内部向けのニュースサイトである **Stars and Stripes** が報じているように、このレセプションではゲイの在日アメリカ軍の軍人たちが招待されており、このことは政治的意義を持って捉えられた (Reed, 2012)。なぜなら、アメリカ軍という組織はアメリカ政治の最も重要な要素を担っているだけでなく、アメリカ軍内の同性愛者の兵士はオバマ政権が行ったLGBTの人権政策を最もよく体現する主体でもあるからである。**Stars and Stripes** は在日アメリカ大使館のレセプションに参加したゲイの兵士の言葉を紹介している。

「アメリカ空軍にいた23年間、自分自身のことを隠して生きてきたことは信じられない」と、メディアには非公開のレセプションに向かう前に **Maschhoff** は語った。「そして、今、私はアメリカ合衆国大統領の特使によるレセプションに招待されている」 (Reed, 2012)。

同性愛者が自分自身を隠さざるを得ない状況から国家に認められ歓迎される主体になったという政治的变化は、オバマ政権がもたらしたLGBTの権利の推進を表象するナラティブとして至る所で用いられている。在日アメリカ大使館のサイトにおけるレセプションに関するニュースでは、同性婚をしゲイであることを日本のマスコミに公に語っているパトリック・リネハン総領事の言葉が掲載されている。

パトリック・リネハン大阪・神戸総領事は、1984年に彼が外交官

になった頃のゲイであることが安全保障上のリスクであると考えられていたときからの、国務省内の素晴らしい変化について次のように語っている。「私はずっと歓迎されていないと感じていた。しかし、だからといって、決して諦めて辞めてしまいたくもなかった。私は自分の仕事が外交に関わるものだと知っていたから、意固地になってクビになってしまわないよう決心した。だから私は、うつむいたまま、何年も沈黙を通した。だけど、私は自分自身を偽らず、自分のアイデンティティも守った。」現在、アメリカ国務省では LGBT の職員とその家族は、彼らの全ての同僚と同様の権利と敬意を享受していると彼は述べた（“U.S. Embassy”, 2012）。

ゲイ男性の視点からの LGBT の権利に関するアメリカ政治の変化の語りは、“Don’t ask, Don’t tell” 政策の廃止がゲイ、レズビアン、バイセクシュアルのシスジェンダーの人々だけに門戸を開いただけで、アメリカ軍内でトランスジェンダーの人々が従軍することが実質的に禁じられたままであるという現在も続いている排除を都合良く覆い隠してしまうばかりではない。「人権施策」として LGBT の人権の擁護を前面に掲げた外交を行うオバマ政権のリベラルな「人権」の擁護者としてのイメージによって、一方でオバマ政権が積極的に行っている無人偵察機を使ったテロリストと目される人々の暗殺などオバマ政権内部の人権問題や、LGBT の人権に関してオバマ政権が問題視する国々の内政への介入の問題などが見過ごされがちになる。LGBT に代表される「人権」の擁護に積極的なオバマ政権のイメージの構築によって、その人権施策全体に付随する問題が批判的に語られることが政治的に困難になってしまうのである。

だが、アメリカ政府内で働くゲイ男性が、つまり、中産階級の、しばしば白人であることが多い男性同性愛者たちをめぐる政治的変化の言説が、同性愛者たちを抑圧していた「古いアメリカ」と彼らを擁護する「新しいアメリカ」、過去と未来の変化を明確に表象し、さらに現在オバマ政権が試みているようにアメリカ国内のこのような比較的新しい政治的表象が国際政治の場に拡大され適用されるとき、どのような政治的意味が生じているのだろうか

か。つまり、LGBTの権利をめぐる、現在、国境や文化的差異を超えてどのような言説が構築されつつあるのだろうか。このような問題は、Jasbir Puar (2007) が提唱した「ホモナショナリズム (homonationalism)」といった概念によってクィア理論では現在活発に議論されている。次は、現在のクィア理論の議論に大きな影響を及ぼしているPuarの議論を追うことによって、その特徴と問題点を確認し、具体的なクリントン国務長官による「ゲイの権利は人権である」演説を批判的に分析する。

3 ホモナショナリズム批評における「アメリカ例外主義」とグローバルな緊張関係

2007年に出版されたJasbir Puarの*Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*は、9.11同時多発テロ事件以降のテロとの闘いにおいて顕在化された現代の生政治とアメリカ社会におけるネオリベラリズム、人種、そしてクィア・ポリティックスの関係について興味深い視点を提起している。Puarは、近年のアメリカにおける主流のゲイ・ポリティックス、もしくはクィア・ポリティックスは、アメリカの人種差別を伴ったナショナリズムに回収されつつあると主張する。Puarは、アメリカ社会におけるゲイ・ポリティックスの主流化とそれによって出現した新しいナショナリズムを「ホモナショナリズム (homonationalism)」と名付け、批判している。

アメリカの「ホモナショナリズム」の特徴として、白人性の優位性、ネオリベラリズムにおける経済の役割などが論じられているが、Puarがその根底に流れているナラティヴとして注目しているのは「アメリカの性的例外主義 (U.S. Sexual Exceptionalism)」である。なぜなら、Puar (2007) は「ホモナショナリズム」をアメリカ帝国主義を支える例外主義の新たな形態のひとつであると考えているからである (p. 2)。Puarが「ホモナショナリズム」という用語を出して以来、この用語は「ピンクウォッシング (Pinkwashing)」² と呼ばれるLGBTがイスラエルの国家的なイメージ戦略に利用されることに対する批判や、イギリスやオランダ、ドイツなどにおける女性やLGBTの権利を理由にしたイスラム教徒への攻撃に対する批判などの文脈に拡大されて用いられており、現在ホモナショナリズムを

「アメリカの性的例外主義」の文脈のみで語ることはできない (El-Tayeb, 2012; Puar, 2010, 2011; Schulman, 2011)。しかし、*Terrorist Assemblages* (2007) では Puar はホモナショナリズムを、アメリカの共同体としての異性愛規範そのものを維持しつつも、アメリカの国家的、文化的な優位性を微づけるかたちで同性愛者を国家の中に内包するナラティブであるとしている。すなわち、彼女は、9.11 同時多発テロ以降の対テロ戦争の中で「同性愛嫌悪的で女性に抑圧的」であるとされる「イスラム文化」と対置するかたちで、健全な異性愛的国家像としてのアメリカを維持しつつ、「例外」的に同性愛者にも寛容であるようなアメリカの国家的、文化的優位性を構築するナラティブを「アメリカの性的例外主義」として名づけ、その一部としてネオリベラリズムとナショナリズムという二つの特徴を持つ同性愛規範 (homonormativity) を「ホモナショナリズム」と定義づけているのである。³ (p. 2)

よって、Puar のホモナショナリズムの議論において、ナショナリスティックで異性愛規範と親和的であるような新しい同性者像がアメリカで出現したことだけではなく、「ムスリムのセクシュアリティ」といったオリエンタリズムに基づいた性的他者が構築されるプロセスも重視されている。Puar は、アブグレイブにおけるアメリカ兵によるホモフォビアに基づく拷問に対するアメリカ国内の言説を検証していくことによって、アメリカ兵の行為そのものがアメリカ軍内のホモフォビアを反映したものであったにも関わらず、アメリカ国内の議論を通して拷問の被害者であるムスリム男性たちにとっていかに同性愛行為がタブーであり裸体や性が抑圧されているのかといった「ムスリム文化のセクシュアリティ」がどのように構築されていったのかを描き出している。そして、そのようなムスリム文化のセクシュアリティが語られていく過程で、逆説的にアメリカ社会が「ムスリム文化のセクシュアリティ」を把握することができる知的、文化的に特権的な位置に置かれるだけでなく、性的に解放され同性愛者たちが自由を享受することができる優れた社会として立ち現れると、彼女は指摘する。

アメリカ兵による露骨なホモフォビア (やその他のフォビア) の行

いによって、実に皮肉的で、しかし予見できることだが、アメリカ合衆国が性的に例外的存在であるかのように立ち現れる。抑圧され、内気で、裸を恥じるような中東よりも同性愛嫌悪が少なく、より同性愛に寛容で（そして、ミソジニーや原理主義により汚されていない）ようなものとして（Puar, 2007, p. 94）。

よって、「アメリカの性的例外主義」は、道徳的にも国家的にも受容可能な身体をもった主体に同性愛を結びつけるだけではなく、アメリカの優位性と文化的境界を確保するためにも働くのである。

彼女の議論においては、たとえ「クィア」であっても「アメリカの性的例外主義」の一部を構成するものである。Puar（2007）は、「クィア」が宗教的な規範の外に構築され、それに反抗するものとして捉えられていると指摘する。クィアが「白人で西洋的な、または西洋化された身体」（p. 14）をもつ世俗的で反抗的で逸脱的な主体であると特徴づけられる一方、アラブ人やムスリムはホモフォビックで原理主義的で不適切な性的主体だとされる。アメリカ社会で考えられている「クィア」像に言及しつつPuarが強調するのは、クィア的な主体がいかにある特定の身体を持った主体として想定され、アラブ人やムスリムの身体は「クィア」であるとさえ見なされないほど逸脱した性的他者として見なされるかということである。この議論の延長で、Puarは、一見、多様なエスニック・マイノリティに開かれている現代の多文化主義も問いに付す。Puarは、Rey Chowの議論に同意しつつ、現代のリベラルな社会は、「白人性の優位性（ascendancy of whiteness）」を脅かさないようなかたちで多文化主義的な身体が組み込まれていると論じる。よって、このような多文化主義的な包括は、階級やジェンダー、そして特にセクシュアリティによって制限されている。たとえ様々なエスニック・マイノリティを受け入れるリベラルな多様性を称揚する社会においても、それは排除の領域を再定義しているにすぎないとPuarは論じる。なぜなら、リベラルな社会が歓迎するような人は、「多くの場合、ストレートで（消費者としても所有者としても）物質的、文化的資本にアクセスすることができ、そして事実、しばしば男性」（Puar, 2007, p. 25）であるからである。このような

歓迎される人々と歓迎されることのない人々は、異性愛規範によって隔てられ、差異づけていると、Puar は主張している。ある特定の歓迎されることのないエスニックの人々は、しばしば「テロリストの身体にアプリアリに書き込まれているオリエンタリズムにまみれたクィアネス（多重婚で病的にホモソーシャルなものとして特徴づけられているために、異性愛規範から外れたもの）」（Puar, 2007, p. 25）を体現していると見なされるからである。

「アメリカの性的例外主義」やホモナショナリズムの議論において、Puar は、他の社会からアメリカ社会を差異化する文化プロセスを極端化し、あらゆる文化事象に見出そうとする。彼女が取り上げるクィアの議論においても多文化主義社会においても、一見他のジェンダーやセクシュアリティ、民族、人種的マイノリティに対して好ましく見えるような社会的変化であるにも関わらず、彼女はそれらを「アメリカの性的例外主義」のナラティブの中に回収してしまうだけではなく、「アメリカの性的例外主義」の核心的要素であるかのように解釈し、「アメリカの性的例外主義」とその他者との二項対立を強調するのである。

学術書よりもより広範な読者が想定されたイギリスの新聞 *The Guardian* に掲載された Puar のイスラエルの「ピンクウォッシング」についての論考においては、このような二項対立がより簡潔な言葉によって表現されている。

イスラエルのピンクウォッシングは、今まで繰り返し使われてきたイスラエルによるパレスチナ占領の表現を使った効果的手法である——イスラエルは文明化されているが、パレスチナ人は野蛮でホモフォビックで文明化されていない、自爆テロ狂いであるといったように（Puar, 2010）。

現在、欧米を中心にした LGBT の承認とその権利の拡大、そしてそれらの国際的な影響を議論するにあたって、Puar の論考は、極めて有益であり、事実、アカデミアにおいてもアクティヴィズムにおいても国際的に最も影響力のあるもののひとつである。それ故に、このような極端な二元論的レト

リックもアメリカのクィア研究者の言説の中で頻繁にみられるものである。コロンビア大学の博士課程で人類学専攻をする Maya Mikdashi (2011) は、アラブ研究所が運営しているアラブ世界に関わるニュースやその批判的分析を発信している *Jadaliyya* というサイトで、クリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説がイスラエルのピンクウォッシュイングの延長線上にあるものだと述べている。彼女は「人権」という概念そのものが、「LGBTQ」といったアイデンティティを通して人々の生を管理することを意味し、政治的権利と共に守るべきとされる人々と政治的権利以外の「人権」を「享受」するのに留まる人々との植民地主義的な区分を反復してしまうことを指摘し、このように述べている。

今日、パレスチナ人への「ゲイの権利」の約束はこのようものだ。アメリカ合衆国は、ゲイとしてであれば侵害されているあなたの権利を守るが、パレスチナ人として侵害されているのであれば守らない。(…)

ピンクウォッシュイングは、イスラム嫌悪やアラブ嫌悪の言説の中によってはじめて政治的戦略として意味のあるものとなる。そして、それはアイデンティティやアイデンティティ主義的な（アイデンティファイが可能な）グループの軸の中に全ての政治を固定してしまおうという大きなプロジェクトの一部である。よって、国際的なクィアの仲間意識を想定するピンクウォッシュイングの批判者たちは、ホモナショナリズムの中心的な教義を繰り返すことになる。それは、同性愛者はそれぞれ共感しあい連帯すべきだ、なぜなら彼らは同性愛者だからである、というものである (Mikdashi, 2011)。(強調は原文)

彼女の分析は、「西洋」と「他者/イスラム」のラディカルな差異を強調し、それをホモナショナリズムの分析の中心とする点で、Jasbir Puar の影響下にあるものとして代表的な言説である。

しかし、クリントン国務長官の演説を読むと、クリントンはホモフォビアと同様に、イスラム嫌悪にも明確に反対している。「イスラム嫌悪や反ユダ

ヤ主義と闘うことは、全ての信仰者の仕事です。そして、[LGBTの] 平等に向けての闘いに関しても同様に真実です」(Clinton, 2011)。2011年に行われ、オバマ政権の LGBT の人権に対する姿勢を表明したのものとして画期的な演説と言われる「ゲイの権利は人権である」演説は、どの点が Puar の「アメリカの性的例外主義」の分析に当てはまり、どの点が彼女のブッシュ政権下のアメリカ社会の分析から変化しているのだろうか。クリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説のナラティブを分析することによって、この点を考察していく。

4 「ゲイの権利は人権である」演説と進歩のナラティブ

ジュネーブで行われたクリントン国務長官の「ゲイの権利は人権である」演説を読むとき、Puar が強調するような「アメリカの性的例外主義」のナラティブを見つけることは難しい。むしろ、合衆国と何百万人ものアメリカ人が世界中の LGBT の人々を支援しているという宣言の部分以外、クリントン国務長官の演説は、アメリカの文化的優越性や「西洋」と「その他者」との文化的対立を構築してしまうことを巧妙に避けている点が特徴的である。世界人権宣言の誕生から始まる彼女のナラティブは、LGBT の権利が、西洋社会の世界における例外的優越性を意味するものではなく、人権という「普遍」的価値の一部であることを示そうとするものである。よって、このナラティブにおいて、LGBT の権利を含む人権の受容への進歩は不可避的なものであるという世界観が提示されている。

このような普遍性に対峙するものとして、クリントン国務長官がこの演説で反論を試みているのは文化相対主義であり、人権は宗教や文化的差異を超えて共有され守られるべき普遍的なものとして位置づけられている。従って、世界の中に存在する「表面」的な差異を超えてこのような普遍性を社会の中で実現していくような「進歩」という概念は、彼女の演説とその政治的意義を支える本質的なものである。

クリントン国務長官は、真理、政治、そして道徳の三つの領域で「進歩」という概念を特徴づけている。

まず第一に、彼女は、真理は信念や思い込みに勝るという原理を提示して

いる。クリントンはこのように語っている。「進歩は率直な議論から始まります。現在、全てのゲイは小児性愛者であるといったり、同性愛は感染したり治したりできる病気である、またはゲイは他の人をゲイにしようとするといったことを述べたり、信じていたりする人がいます。しかし、これらの考えは単に真実ではありません」(Clinton, 2011)。クリントンは、話し合いがLGBTの問題に関して人々の理解を深め、間違った「思い込み」を正していくことを強調している。ここでは彼女は議論や話し合いの重要性に焦点をあてているが、このような強調において文化や宗教的差異として見なされている「思い込み」や「信念」に対して真理が打ち勝っていくような原理が前提にされており、この演説において明確に示されている。

第二に、クリントンは、法は一般社会の広範な人権の承認に先行するものであり、人々に対して教育的効果をもつ点を強調している。すなわち、進歩は法の改革によってもたらされるとされる。このような強調は明らかに、ある政府が国内の人々の準備がまだできていないためにLGBTに関わる政治的問題に対して積極的に行動をしないとといった言い分への反駁が目的とされている。しかし、同時に、政治は進歩が実現される特別な領域であるという考えが支持されている。

第三に、同情や共感といった道徳が、人々が進歩に向けて変化する精神的領域として特徴づけられている。

進歩は他人の立場に立って考えようという気持ちから来ます。私たちは自分自身に問いかけなければなりません。『もし自分の愛する人を愛することが犯罪とされたらどのように思うのだろうか？』『自分では変えることのできない自分に関わることで差別されたらどのように感じるのだろうか？』現在深く抱いている信念を反省するとき、寛容と全ての人々の尊厳を尊重することを学ぼうとするとき、そしてより良く理解し合えるという希望のもとに考えの異なる人々と謙虚に関わろうとするとき、このような問いかけは私たち全てに当てはまりません。(Clinton, 2011)

このような真理、政治、道徳の考えは、啓蒙主義のものを簡潔に表現したものであり、クリントンが提示した「進歩」の概念はユルゲン・ハーバマス（1997）が議論を行っているような啓蒙主義の「近代」の科学、法、道徳のモデルを反映したものである。ハーバマス（1997）は、ニコラ・ド・コンドルセを引用しつつ、いかに「近代」が芸術や科学を通じて、自己と世界の理解、道徳における進歩、社会機構における正義、そして人間の幸福そのものを促進するものであると信じられていたかを指摘している（Habermas, 1997, p.45）。

事実、クリントンが提示した「進歩」のあり方は西洋中心主義的な啓蒙の理念を単に反映したものであるだけでなく、植民地主義的な効果も持っていると考えられるだろう。彼女が LGBT の権利が宗教や文化的差異を超える普遍性を持つと主張する時、このような主張とその背景にあるアメリカという大国の国力とその影響力は不可分であり、文化的、道徳的強制を伴った「進歩」によってアメリカが重要と見なすような他国の政治的改変に正当性が与えられてしまう。イギリスによるインドへの植民地主義の文脈で Gauri Viswanathan（1988）は、文化的同化は最も効果的な政治的行為のひとつであり、植民地下で喧伝されたヨーロッパ的な「理想的な人間像」は植民地支配の道具であったと述べている。彼女は論文で 19 世紀のボンベイに務めていたイギリス領インド植民地政府の高官の言葉を引用している。「現地の人々は、我々の力によって押さえ込んでおくか、彼らが持ちえるいかなる支配者よりも我々がより賢く、より正しく、より人道的で、彼らの状況の改善により心を砕いていると確信させて自ずから服従させるかしなければならない」（Viswanathan, 1988, p. 85）。

しかし、19 世紀のイギリス高官の言葉とクリントン国務長官の演説を比較するとき、彼女の演説が世界におけるアメリカの優越性を高らかに宣言するというよりも、むしろアメリカの優越性を一見否定するようなレトリックを用いて書かれていることが明らかになる。イギリス高官の言葉においては、インドの人々が誰が最も優れた支配者であるかと考えるかが政治的問題だった。しかし、クリントン国務長官の演説では対照的に、2003 年まで存在していたソドミー法や現在もある LGBT の人々への暴力やハラシメントな

どアメリカ合衆国もまた間違いを犯してきたということが繰り返し述べられている。

よって、Puarの「アメリカの性的例外主義」という批判に従いそれをクリントンの演説に当てはめるとしたら、クリントンのナラティブにおいてはアメリカが世界において「例外的」であるのは、他の国々と同様に間違いを犯すことがあっても、自分が犯してきた間違いに気づき、進歩していく点にあることになる。しかし、もっと興味深いことは、南アフリカ、コロンビア、アルゼンチン、ネパール、モンゴルなど、LGBTの人々を守るために法の改正を行った西洋以外の国々が多く言及されていた点である。彼女の演説において、「進歩」という言葉で表現されるアメリカの歴史的歩みの普遍性やLGBTの人々のための外交政策の正当性は、文化背景や宗教を共有していないのにも関わらず、それでもなお人権分野でアメリカのような変化を行う国々が担保しているのである。

ジュネーブでのクリントンの演説が行われた直後、Advocate.comやSeattle's LGBT Newsなどのアメリカのゲイニュースサイトが、アジアやロシア、東ヨーロッパ、南米、アフリカの女性やLGBT権利のアクティビストの肯定的なコメントを掲載した（Anderson-Minshall, 2011; "International", 2011）。LGBTの権利のための国際的な政治的活動を正当化するために、クリントンのナラティブだけではなく、アメリカのゲイメディアにおいても、「西洋」でもなく極端に「ホモフォビック」な国とも見なされていない「第三国」で、文化的には異なるのにも関わらず「西洋」諸国がすでに行ったような政治的変化を「遅れながら」に行った国々が用いられているのである。これらの第三の国々は、クリントンが「進歩」と呼ぶような世界が歩んでいかなければならないような歴史的過程を表象するために用いられている。このような「第三国」が強調され、それらが普遍的な歴史的過程を表象するかのようには用いられるのは、「彼ら」は文化的にも、政治的にも、歴史的にも異なるのにも関わらず、彼らは「私たち」に同意をし「私たち」が行ったような政治的変化を行っているといった具合に表象されるからである。クリントンのナラティブでは、アメリカの世界での優越性や無謬性がアメリカの普遍性を証明しているのではなく、あたかも追従しているかのようにアメリカ

のような変化を行っている「第三国」の存在がアメリカの「進歩」の歩みを確認しその普遍性を確かなものにしてしているのである。「アメリカの性的例外主義」とその他者、または「西洋」と「イスラム」といった極端な差異を強調しようとする Puar を代表とするようなアメリカのクィア批評によるホモナショナリズム批判は、まさにこのような政治的ダイナミズムを見落としがちになる。「アメリカの性的例外主義」はたしかにアメリカの文化的、政治的優越性の信仰に依存しているが、このような優越性は常に他者の劣位性のみを必要とするだけでなく、彼らの優越性を「追認」するような他者の支援をも依拠するのである。

クリントンの演説におけるナラティブやゲイメディアの報道では、このような「第三国」への言及はアメリカの政治的影響力やその優越性を補完する役割に徹していて、一見、大した影響も政治的な問題も含有していないようにみえる。だが、真理、政治、道徳によって特徴づけられているクリントンの「進歩」というナラティブは、LGBT の権利がどのようにあるべきかを固定してしまうだけでなく、皮肉なことに「無知」の領域をも再設定してしまう。2012年4月、イギリスのLGBTニュースサイトであるPinkNewsは、アメリカのシラキュース大学でクリントン國務長官がアジアやアフリカの指導者にとって女性やゲイの権利は「完全に異国の概念」(Park, 2012)であると考えていると語ったと報じた。彼女の言葉を報じるPinkNewsの論調は、政治的な問題というよりも文化的差異をジョークとしたものだった。このような報道では、アメリカの内政干渉を警戒するために指導者たちが無知を装っているという外交戦略の一部である可能性があるにも関わらず、外国の指導者の態度は容易に「無知」や理解し難い「文化的差異」、または「完全に異国の概念」として見なされてしまう。クリントンは演説で対話が「進歩」を作り出すと語ったが、逆説的にすでにあるべきモデルが定められた「進歩」が対話を閉ざしているのである。

5 「進歩」のナラティブの日本への影響

アメリカを中心にしたLGBTの政治のナラティブでは、日本は社会制度や経済は「西洋」的である一方で、文化は「西洋」から遠くはなれたものと見

なされるために、日本の政治状況はこのような「第三国」のものとして頻繁に用いられるものである。欧米の社会的、文化的文脈によって発展してきたLGBTの権利が規範的なモデルとして捉えられるとき、英米を中心にした海外の影響を受けつつも日本の社会の中で練り上げられてきたLGBTの運動や状況が、単に「アメリカ化」としてのみ表象されてしまう事態が生まれつつある。

現在、アメリカ政府は日本でのLGBT支援の一環として、積極的にLGBTの権利の啓発活動や大使館で上川あや世田谷区議が**Woman's Encourage Award**を授与されるなどアクティヴィズムも含めた支援を行っている。そのような活動によって、日本でのLGBTの可視化が進むというメリットがある一方、LGBTの権利そのものを「アメリカ」に領有される危険性がある。LGBTの権利やアイデンティティが「アメリカ的なもの」として捉えられてしまうことにより、日本のセクシュアル・マイノリティーズのこれまでの運動やアイデンティティ、そして現在直面しているローカルな政治的文脈の問題が切り落とされてしまうか、英米の状況との比較によって「後進的」であると表象されてしまうか、単にユニークな文化的特徴として安易に消費の対象となってしまう状況に現在直面していると言えるのではないだろうか。⁴ または、このようにLGBTの権利を推進したとしても、表面的な欧米の制度を移植するだけで日本社会に深く根付いている異性愛規範やマイノリティへの嫌悪そのものは問われない可能性もあるだろう。

現在の段階で、このような問題が顕著に現れているのは、報道においてであろう。日本のLGBTについての報道に関して興味深いのは、日本のLGBT事情が進んだ「西洋」との比較によって、いかに安易に「遅れた」社会として表象されるのと同時に、LGBTの権利のモデルとしての「アメリカ」もまたいかに再構築されるのかということである。2011年4月に、石川大我と石坂わたるというカミングアウトをしている男性同性愛者の政治家が日本で初めて当選したときに、**Huffington news**が石川と比較したのは30年以上前に活躍していたアメリカのゲイの政治家であったハーヴェイ・ミルクだった（“Taiga”, 2011）。同時に、この記事で強調されていたのは、当時アメリカで大きな話題になっていた同性婚の話題であり、石川が日本でも同様に同

性婚の合法化を志すと、日本の社会的状況に関して何ら説明をすることなく、当然のようにアメリカのような政治過程を歩んでいく前提で報じられた。石坂に焦点をあてた CNNGo では、記者が石坂に、日本はゲイの権利に関して他のアジア諸国に比べたら比較的進んでいるが西洋諸国に比べては遅れていると思うかと直接石坂に質問している (Robinson, 2011)。アメリカ社会と比較を行い、日本の LGBT の状況への関心をほとんど持たないのにも関わらず、日本はどれほどアメリカのような権利の制度化を達成したのか、またはどれほど遅れているのかのみに焦点があてられたのである。

西洋諸国を中心にした先進国をモデルにどの程度「進歩」を達成したかというナラティブは海外のメディアのみに見出されるものではない。2012年7月に『週刊東洋経済』と『週刊ダイヤモンド』が LGBT マーケット特集を組んだが、両誌とも LGBT の取り上げ方で共通していたのは市場という視点から LGBT という集団の新たな価値の発見という側面だけではなく、先進国ではすでに行われているのにも関わらず、日本では LGBT の社会制度化が「遅れて」いるというナラティブもあったことは見逃してはならないだろう。アメリカを中心にした西洋諸国をモデルにした「進歩」のナラティブは、現在、日本社会においても影響を持ちつつあるのである。

6 結論

本稿は、西欧諸国を中心に近年急速に進みつつある LGBT の政治的主流化によって生まれつつある新たな国際関係の表象とその影響を論じた。LGBT の政治的主流化の例として、オバマ大統領の「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー・プライド月間」の宣言文と東京のアメリカ大使館でプライド月間に合わせて行われたレセプションに関する報道を例に、オバマ政権による LGBT の権利擁護の政策の中でいかに LGBT の権利がアメリカの安全保障や「新しい」解放的なアメリカという国家の優越性の表象に結びつけられているだけでなく、その中で未だ存在するトランスジェンダーの排除やオバマ政権下での人権の問題が巧妙に隠されている点を指摘した。次に、現在クィア研究において活発に議論されているホモナショナリズムという問題において、最も影響力を持っている Jasbir Puar の議論を整理

しつつ、彼女の議論が西洋とイスラム/他者という二項対立を強調することによって、その二項対立には入りきらない「第三国」を経由して行われているオバマ政権下によるLGBTの権利推進のナラティブの特徴を把握できない点を論じた。さらに、このようなナラティブは、アメリカのメディアによる日本への視線ばかりではなく、日本国内のメディアにも影響が現れ始めている。

LGBTの政治運動の中でクリントン国務長官の演説は確かに画期的であり、一方で歓迎されるのは当然だろう。しかし、このような「アメリカ」の安易なモデル化は、日本の状況の文脈や日本のセクシュアル・マイノリティーズの歴史を見落としてしまうことにつながるだけではなく、異性愛主義とナショナリズムが結びついたLGBTへのバッシングを招く危険性とも隣り合わせだということも忘れてはならないだろう。クィア理論は、ジェンダーに先立つセックスや異性愛主義など規範を規定する起源を想定した思考やそれを前提にした社会制度に批判的眼差しを投げかけてきたが、LGBTの「解放」というメッセージとともにLGBTの権利や「理想」的社会についてのモデルが想定され、それがあたかも他の社会が参照とすべき「起源」であるかのような言説が生まれつつある現在、クィア理論に更なる批判的想像力が求められていると言えるのではないだろうか。

Footnotes

- ¹ ここでの「ナラティブ」とは、単なる「物語」という意味ではなく、多様な事実や情報をつなぎ合わせて私たちの現実を認知可能なものにする言語使用のことを指す。政治分析において「ナラティブ」に注目することの有効性については、**Molly Patterson and Kristen R. Monroe (1998)** を参照。
- ² 「ピンクウォッシュイング」とは、LGBTの権利や自由を強調しイスラエルの近代的な民主主義国家としての肯定的な国家イメージを促進することによって、イスラエルによるパレスチナへの暴力を隠蔽したり、それに起因するイスラエルに対する否定的なイメージを塗り替えてしまおうとするイスラエルの国家的なイメージ戦略を批判的に言及する用語である。
- ³ ネオリベラリズムとの親和性をもった同性愛規範（ホモノーマティヴィティ）については、**Lisa Duggan (2003)** を参照。
- ⁴ 日本においてLGBTの権利やアイデンティティが「アメリカ的なもの」と位置づけられつつあるのではないかという可能性を考察するとき、**Tokyo SuperStar Awards** は興味深い文化事例になるかもしれない。**Tokyo SuperStar Awards** は2010年に設立されたアワードであり、『日本のLGBTの可視化』『多様性尊重の経営に取り組む企業・プロダクトの紹介』『LGBTコミュニティから未来を担う日本の子どもたちの支援』の3つの活動を展開するプロジェクトの総称（**Tokyo SuperStar Awards, 2012**）であると、日本のLGBTの可視化や支援が謳われているのにも関わらず、海外賞が生まれ、2010年はレディ・ガガ、2011年は米国ニューヨーク州アンドリュー・クオモ知事、2012年はバラク・オバマ大統領と続くなど、アメリカの著名人や政治家に送られ続けている。また、企業賞においても、2010年にグーグル、2012年に日本IBMなど、アメリカ企業の現地法人に授与されている。

References

- Anderson-Minshall, D. (2011, December 7). LGBT Activists From Around the World React to Clinton's Speech. *Advocate*, Retrieved August 28, 2012, from http://www.advocate.com/News/Daily_News/2011/12/07/LGBT_Activists_from_Around_the_World_React_to Clintons_Speech/
- Cameron warns of African aid cuts to anti-gay countries. (2011, October 10). *BBC News*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.bbc.co.uk/news/world-africa-15243409>
- Clinton, H. R. (2011, December 6). Remarks in Recognition of International Human Rights Day. U.S. *Department of State*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.state.gov/secretary/rm/2011/12/178368.htm>
- Duggan, L. (2003). *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*. Boston: Beacon Press.
- El-Tayeb, F. (2012). 'Gays who cannot properly be gay': Queer Muslims in the neoliberal European city. *European Journal of Women's Studies* 19, 237-252.
- Habermas, J. (1997). Modernity: An Unfinished Project. *Habermas and the Unfinished Project of Modernity: Critical Essays on The Philosophical Discourse of Modernity*, d'Entrèves, M. P. and Benhabib, S. (eds.). Cambridge: The MIT Press. 38-56.
- International reaction to Clinton's U.N. speech Compiled from the Council for Global Equality. (2011, December 9). *Seattle's LGBT News*, Retrieved August 28, 2012, from http://www.sgn.org/sgnnews39_49/page8.cfm
- Mikdashy, M. (2011, December 16). Gay Rights as Human Rights: Pinkwashing Homonationalism. *Jadaliyya*, Retrieved August 28, 2012, from http://www.jadaliyya.com/pages/index/3560/gay-rights-as-human-rights_pinkwashing-homonationa
- Myers, S.L. and Cooper, H. (2011, December 07). U.S. to Aid Gay Rights Abroad, Obama and Clinton Say. *New York Times*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.nytimes.com/2011/12/07/world/united-states-to-use-aid-to-promote-gay-rights-abroad.html?pagewanted=all>
- Park, J. (2012, April 25). Hillary Clinton: In Asia and Africa gay rights is a 'totally

- foreign concept'. *Pinknews*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.pinknews.co.uk/2012/04/25/hillary-clinton-in-asia-and-africa-gay-rights-is-a-totally-foreign-concept/>
- Patterson, M. and Monroe, K. (1998). Narrative in Political Science. *Annual Review of Political Science*, Vol.1, 315-331.
- Presidential Proclamation--Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Pride Month. (2011, May 31). *The White House President Barack Obama*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2011/05/31/presidential-proclamation-lesbian-gay-bisexual-and-transgender-pride-mon>
- Puar, J. (2007). *Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*. Durham and London: Duke University Press.
- Puar, J. (2010, July 1). Israel's gay propaganda war. *The guardian*, Retrieved August 28, 2012, from <http://www.guardian.co.uk/commentisfree/2010/jul/01/israels-gay-propaganda-war#start-of-comments>
- Puar, J. (2011). Citation and Censorship: The Politics of Talking About the Sexual Politics of Israel. *FEMINIST LEGAL STUDIES*, Vol. 19, Number 2, 133-142.
- Reed, C. (2012, June 5). US troops take part in LGBT Pride Month reception at US Embassy in Tokyo. *Stars and Stripes*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.stripes.com/news/us-troops-take-part-in-lgbt-pride-month-reception-at-us-embassy-in-tokyo-1.179606>
- Robinson, M. (2011, June 6). Definitely not the only gay in the village: Tokyo's minorities finally find their voice in local politics. *CNNGO*, Retrieved August 28, 2012, from <http://www.cnngo.com/tokyo/life/definitely-not-only-gay-village-001023>
- Schulman, S. (2011, November 22). Israel and 'Pinkwashing'. *The New York Times*. p. A31.
- Statement of African social justice activists on the threats of the British government to "cut aid" to African countries that violate the rights of LGBTI people in Africa. (2011, October 28). *African Feminist Forum*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.africanfeministforum.com/statement-of-african-social-justice-activists-on-the-threats-of-the-british->

government-to-%E2%80%9Ccut-aid%E2%80%9D-to-african-countries-that-violate-the-rights-of-lgbti-people-in-africa/

Taiga Ishikawa, Openly Gay Japanese Politician, Wins Election In Tokyo. (2011, April 27) *Huffington news*, Retrieved August 28, 2012, from http://www.huffingtonpost.com/2011/04/27/taiga-ishikawa-japan-gay-politician-_n_854365.html

Tokyo SuperStar Awards. (2012). Retrieved December 18, 2012, from <http://www.tokyosuperstarawards.com/>

U.S. Embassy Honors LGBT Pride. (2012, June 11). *Embassy of The United State TOKYO · JAPAN*. Retrieved August 28, 2012, from <http://japan.usembassy.gov/e/p/tp-20120611-01.html>

Uganda fury at David Cameron aid threat over gay rights. (2011, October 31). *BBC News*. Retrieved August 28, 2012, from <http://www.bbc.co.uk/news/world-africa-15524013>

Viswanathan, G. (1988). The Politics of British Educational and Cultural Policy in India, 1813-1854. *Social Text*, No. 19/20 Autumn, 85-104.

「国内市場5.7兆円『LGBT市場』」(2012, July 14). 『週刊ダイヤモンド』, pp. 131-147.

「日本のLGBT」(2012, July 14). 『週刊東洋経済』, pp. 122-135.

Americanized LGBT Human Rights: the Narrative of Progress and the Speech "Gay Rights are Human Rights" Kazuyoshi KAWASAKA

This paper examines the mainstreaming of LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender/sexual) rights in North American and European countries in recent years, and its international effects. This paper analyzes the rhetoric of President Obama's LGBT Pride month declaration and the discourses of the Internet news media reporting about the LGBT pride month reception at the US embassy in Tokyo. It argues that LGBT human rights contributes to representations of U.S. superiority as the advanced, liberated country and also points out that such representations of U.S. superiority subtly obscure the inequality and other human rights issues that the Obama administration faces. Further, this paper examines the arguments of "homonationalism" by Jasbir Puar, which is one of the most influential theoretical works in queer studies today and points out one of the weaknesses of her arguments: the dualism between the "West" and "Islam/other," especially when she conceptualizes a narrative of "U.S. sexual exceptionalism." This paper notes that her concept of "U.S. sexual exceptionalism," which stresses the dualism between "the West" and "Islam/Other," cannot properly analyze the characteristics of the Obama administration's narrative for LGBT rights especially as expressed in Secretary Clinton's groundbreaking speech, "gay rights are human rights" at Geneva. In her speech, Secretary Clinton accented improvements of LGBT rights issues of "third countries" for global sexual politics which are neither "the West" nor the countries officially against LGBT rights, but have been changing their social systems as "the West" have done already. Finally, this paper concludes by pointing out that the US-centric LGBT rights rhetoric has begun influencing Japanese society as well. The ideas of the US-centric LGBT politics and human rights have been introduced as normative standards in society, especially by the mass

media which had rarely paid attention to LGBT issues in Japan before. The normalization of LGBT rights can cause politically problematic representations of LGBT rights as merely the “Americanization of Japanese society” and ignore the context of Japanese society and history of LGBT activism in Japan.

Keywords:

queer, homonationalism, LGBT, human rights, pinkwashing